

「jenchixiqi (善知識)」考 3

市井 外喜子

A Study of “jenchixiqi” 3

Tokiko Ichii

要旨 『平家物語』の諸本には、それぞれの宗教性を背景とする語句が見られる。これまでに「Guiuō・祇王」（「ぎわう」の表記に異なりが見られる。煩瑣を避けるために、高野本の「祇王」表記を用いることにする。）章段における「góxō（後生）」を巡る古典平家と天草版平家の特徴を吟味・分析し「góxō（後生）」考として報告してきた。さらに同じ仏教語である「jenchixiqi（善知識）」についても吟味・分析し、『大東文化大学紀要』第50号に、古典平家と天草版平家の「Guiuō・祇王」章段における「うれしかりける善知識かな」の有無に注目し、天草版平家物語は、古典平家物語諸本のように「Guiuō」章段を、女人往生譚として終らせていないことを報告した。第51号では、善知識滝口入道の平維盛への教化・おなじく善知識である大原の本性房湛豪の平宗盛への教化を中心に吟味し、天草版平家の古典平家からの教化内容のとりこみ様を報告した。

今回は、八坂系「中院本」と覚一系「高野本」の古典平家二本を中心に、「祇王」章段における「うれしかりける善知識かな」の有無に注目し、古典平家間の『平家物語』の発展と宗教（浄土教）の進展との関係を吟味した。「中院本」には、「うれしかりける善知識かな」が欠文であるのは、法然義の要素の濃い女人往生譚の「高野本」とは異なり、それ以前の天台浄土教的な信仰を背景とするためである。二本ともに女人往生譚ではあるが、宗教（浄土教）の進展が「うれしかりける善知識かな」の有無に、影響をおよぼしたものである。天草版平家物語が「うれしかりける善知識かな」を欠文とし、Guiuō章段を女人往生譚として終らせないのとは、異なるものである。

目次

- 1 はじめに
- 2 中院本（ぎわうぎによ事）・高野本（祇王）の冒頭部・終尾部
- 3 清盛の「不思議の事」
- 4 信仰生活
- 5 おわりに（まとめとして）

1. はじめに

『大東文化大学紀要』第50号(人文科学2012年3月)に、「jenchixiqi(善知識)」考を報告した。その要旨は、次のようなものである。

古典平家物語諸本に見られる「祇王」(諸本により表記に異なりがあるため、高野本の表記を用いる)章段の「善知識」が、天草版平家物語には見られない。何故、天草版平家物語は、古典平家物語の「うれしかりける善知識かな」を欠文とするのかを考察した。天草版平家物語は、古典平家物語諸本のように「Guiuō・祇王」章段を女人往生譚として終らせていない。

この報告に用いた古典平家物語は、次の七本である。

- 1 屋代本 『屋代本高野本対照平家物語』 新典社
- 2 国会本 新潮日本古典集成『平家物語』 新潮社
- 3 斯道文庫本 『百二十句本平家物語』 汲古書院
- 4 小城本 『小城鍋島文庫本平家物語』 汲古書院
- 5 高野本 新日本古典文学大系『平家物語』 岩波書店
- 6 葉子十行本 日本古典全書『平家物語』 朝日新聞社
- 7 流布本 『平家物語』 おうふう

なお天草版平家は、『天草版平家物語対照本文及び総索引』(江口正弘著 明治書院)を使用した。

今回は、八坂系「中院本」の「ぎわうぎによ事」(「ぎわう」の表記に異なりが見られる。煩瑣を避けるために、高野本の「祇王」表記に統一することにする)章段と覚一系「高野本」の「祇王」章段の「うれしかりける善知識かな」の有無に注目し、両平家の特徴を明らかにしたい。

「中院本」・「高野本」の平家物語は、下記のものである。また必要に応じて「京都本」も援用する。

- 中院本 高橋貞一編著『平家物語(中院本)と研究(一)』未刊国文資料刊行会
- 高野本 新日本古典文学大系『平家物語』上 梶原正昭 山下宏明校注 岩波書店
- 京都本 『平家物語百二十句本』高橋貞一校訂(京都府立資料館蔵本) 思文閣

2. 中院本(ぎわうぎによ事)・高野本(祇王)の冒頭部・終尾部

中院本・高野本両本の冒頭部・終尾部は、それぞれの特色を端的に示している。

最初に「中院本」の冒頭部を見る。次のようにはじまる。

むかしより源平りやう家、てう家にめしつかはれて、わうくわにしたがはず、朝けんをかるむずるものあれば、たがひにいましめをくはへしかば、世のみだれもなかりしに、保元のためよしきられ、平治によしともうたれしかば、すゑずゑの源氏ありといへ共あるいはながされ、あるいはちうせられ、今は平家の一るいのみはんじやうして、いかならんすゑの世までもなに事かあら

んとぞ見えし、入だうかやうにてんかをたな心のうちににぎり給しかば、世のそしりをもはゞからず、人のあざけりをもかへりみず、ふしぎの事をのみし給けりたとへば其比みやこにきこえたるしらびやうし、ぎわうぎによとてをとゞいあり、とちと申しらびやうしのむすめ也(ぎわうぎによ事)

続いて「高野本」の冒頭部を示す。次のようである。

入道相国、一天四海をたなごゝろのうちに握り給ひしあひだ、世のそしりをも憚らず、人の嘲をもかへりみず、不思議の事をのみし給へり。たとへば其比、都に聞えたる白拍子の上手、祇王・祇女とておとゞいあり。とちといふ白拍子がむすめなり。(祇王)

参考のために古態を残す語り本系の「屋代本」の冒頭部を示す。

入道相国、加様ニ天下ヲ掌ニ掬給之間、世ノ謗ヲモ不_レ憚、人ノ哂ヲモ不_レ顧、不思議ノ事ヲノミシ給へり。譬へハ、其ノ比都ニ聞ヘタル白拍子ノ上手、義王義女トテ兄弟有リ。閉ト云白拍子ノ娘也。(本文は巻十二の後に、「平家抜書一卷之内義王義女仏閉事同出家事」)

上記三本の「祇王」章段冒頭部を比較すると、中院本冒頭部の特異性が注目される。高野本・屋代本の冒頭部に先立つ前文を持つ中院本の冒頭部は、どこに見られるかを吟味したい。

○高野本では、「祇王」章段に続く「二代后」章段冒頭にあり、それは次のようにはじまる。

昔より今に至るまで、源平両氏朝家に召つかはれて、王化にしたかはす、をのつから朝権をかるむする者には、互にいましめをくはへしかば、代の乱れもなかりしに、保元に為義きられ、平治に義朝誅せられて後は、すゑずゑの源氏とも、或は流され或はうしなはれ、今は平家の一類のみ繁昌して、かしらをさし出すものなし。いかならん末の代までも何事かあらむとそみえし。

○屋代本では、「白拍子義王仏等事但有別紙」の前章段「清盛出家事」章段の終尾にあり、それは次のようである。

源平両氏朝家ニ召仕ハレテ、王化ニ不_レ随朝憲ヲ軽スル者ニハ互ニ誠ヲ加エシカハ、世ノ乱モ無リシニ、保元ニ為義切レ、平治ニ義朝討テテ後ハ、末々ノ源氏少々有シカ共、或ハ被_レ流或ハ被_レ誅テ、今ハ平家之一類ノミ繁昌シテ、首ヲ指出ス者ナシ。イカナラム末ノ世マテモ何事カ有ント、目出ウソ見タリケル。

高野本では、「祇王」章段に続く「二代后」章段冒頭に、屋代本では、「白拍子義王仏等事但有別紙」の前章段「清盛出家事」章段終尾にあり、両本とも二章段にわたり、中院本冒頭部を持つことになる。

前掲の古典平家諸本の、中院本冒頭部の位置を示す。(屋代本・高野本は、除く)

○国会本 巻第一第二句三台上祿(終尾) → (第三句二代后 → 第四句額打論) → 第五句義王

○京都本 巻第一第二句さんだい上ろく(終尾) → (第三句二だいきさき → 第四句がくうちろん) → 第五句ぎわう

○斯道文庫本 巻第一第二句参内上祿(終尾) → 第三句義王

○小城本 巻第一清盛出家事(終尾) → 白拍子義王佛等事

○流布本 巻第一我身の栄花 → 妓王 → 二代の後(冒頭)

○葉子十行本 卷第一二代后(冒頭)→(額打論→清水炎上)→妓王

作表にして観察を示す前に、中院本冒頭部の区分けを次に示しておきたい。

I区分：むかしより源平りやう家～なに事かあらんとぞ見えし

II区分：入だうかやうにてんかを～ふしぎの事をのみし給けり

III区分：たとへば其比みやこにきこえたるしらびやうし～とちと申しらびやうしのむすめ也

「祇王章段冒頭部の整理表(接続関係)」として次に示す。

	(I・II・III)	I・(II・III)	(II・III)・I	I—(II・III)	備考
中院本	○				
屋代本		○			IIを欠く
斯道文庫本		○			
小城本		○			
高野本			○		
流布本			○		
国会本				○	第三句、第四句を間に持つ
京都本				○	第三句、第四句を間に持つ
葉子十行本				○	額打論、清水炎上を間に持つ

上記の接続関係表から得られる注目すべき点を、箇条書きとして示す。

- 1 中院本のみが(I・II・III)を連続して「ぎわうぎによ事」の冒頭に位置している。「ぎわうぎによ事」が、I平家一門による専制時代における・II清盛の専横的な行為「不思議の事」の・III例話として、祇王説話を語る とする前文の必要条件が揃い、後にその詳述が続くという一貫性のある書き出しといえる。
- 2 中院本以外の古典平家は(II・III)をひとまとまりとする「入道相国、一天四海をたなごころのうちに握り給ひしあひだ～」とする語りははじめであるが、中院本I区分を「祇王」章段に持っていない。例話「祇王」がどのような背景の時のものかを明示していない。小城本は「清盛の専横的な行為(不思議の事)」も欠き、「祇王」説話としては安定度が弱い。
- 3 中院本I平家一門による専制時代相当部は、諸本により「祇王」章段の前に置かれたり、後に置かれたりと、二章段にまたがるのが注目される。
- 4 百二十句本に属する諸本には、二つの特徴が見られる。斯道文庫本・小城本の漢字・片仮名交り本と、国会本・京都本の平仮名本との異なりである。国会本・京都本の第二句三台上祿(終尾：I)は、第三句二代后・第四句額打論の二句を越えて、(II・III)の第五句義王に続くことになる。第五句義王は、前章段とはつながりがなく独立性が強い。一方、斯道文庫本・小城本は、第二句参内上祿(終尾：I)・第三句義王(II・III)と二句にまたがるが、連続性が見られる。漢

字・片仮名交り本（斯道文庫本・小城本）と、平仮名本（国会本・京都本）間には、接続関係の強弱が目される。古態を残す屋代本は、漢字・片仮名交り本の百二十句本と同系にあると言えよう。したがって中院本のみが冒頭に（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）を有し、祇王説話語りとして最もよい連続性を見せていることになる。

これまでは冒頭部の吟味であった。ここからは、終尾部を吟味することとする。

最初に「中院本」の終尾部を見る。次のように終える。

入道仏をうしなひて、手にてをわけてたづねさせられけれどもなかりけり、じやうかいほとけはあまりにみめのよかりつれば、てんぐがとりたるにこそこのたまひける、其後や、ありてき、いだされたりけれ共、さやうになりたらんずるものをばとて、たづねられざりけり、かのちやうかうだうのくわちやうにも、ぎわうぎ女とぢらがゆうれいと、入られけるとぞうけ給はるあわれなりし事どもなり

続いて「高野本」の終尾部を記す、次のようである。

されば後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、「祇王・祇女・仏・とぢらが尊霊」と、四人一所に入られけり。あはれなりし事どもなり。

参考のために古態を残す語り本系の「屋代本」の終尾部を示す。

入道相国仏御前ヲ失テ、手ヲ分テ被_レ尋ケレ共無リケレハ、「一定入道カ仏ハ、天狗ニ被_レ取タリ」トソ宣ケル、遙ニ在テ聞出サレタリケレ共、「左様ニ思立テ浮世ヲ厭ハン者ヲ、中々兎角云ニ不_レ及」トテ、其後ハ尋モ無リケリ。サレハ後白河法王ノ長講堂ノ過去帳ニ、「義王、義女、仏、閉等カ尊霊」ト、四人一所ニ入セ給ケリト聞ヘケルソ忝ナキ。

上記三本の終尾部を整理するために、次のように中院本終尾部を区分けした。

Ⅳ区分：入道仏をうしなひて、手にてをわけて～たづねられざりけり

Ⅴ区分：かのちやうかうだうの～入られけるとぞうけ給はる

Ⅵ区分：評語（あわれなりし事どもなり）

この終尾部三分区（Ⅳ：仏探索 Ⅴ：長講堂の記事 Ⅵ：評語）を、「祇王章段終尾部の整理表」として以下に示す。古典平家物語「祇王」章段終尾部の吟味は、この作表にしたがって行ない、得られた注目すべき諸点は、簡条書きにして示す。

	Ⅳ	Ⅴ	あわれなりし事どもなり
中院本	○	○	○
屋代本	○	○	忝ナキ
斯道文庫本	○	○	○
小城本	○	○	○
高野本		○	○
流布本		○	難有かりし事ども也

国会本		○	○
京都本		○	○
葉子十行本		○	○

- 1 中院本は、仏探索（Ⅳ）・長講堂の記事（Ⅴ）・評語のあわれなりし事どもなり（Ⅳ）の終尾部を持つ。
- 2 中院本終尾部に見られる清盛の仏探索の記述も「不思議の事」の一つである。高野本には見られない。高野本と同じ覚一系統本の流布本・葉子十行本にも、清盛の仏探索の記述は無い。
- 3 百二十句本に属する諸本には、二つの特徴が見られる。斯道文庫本・小城本の漢字・片仮名交り本と、国会本・京都本の平仮名本との異なりである。国会本・京都本には、清盛の仏探索（Ⅳ）が見られない。一方、斯道文庫本・小城本には、Ⅳ・Ⅴ・Ⅳの三区分別が揃っている。漢字・片仮名交り本（斯道文庫本・小城本）と、平仮名本（国会本・京都本）間には、冒頭部の接続関係に強弱が目されたように、終尾部においても異なりが目される。なお古態を残す屋代本は、漢字・片仮名交り本の百二十句本と同系の特色を持つ。
- 4 Ⅴの長講堂の過去帳の記事は、とりあげた古典平家諸本には、すべて見られる。清盛の仏探索の記事の収載には、特色が見られる。覚一系統本および平仮名本の百二十句本には記載されず、古態を残す屋代本・漢字・片仮名交り本の百二十句本には記載されている。
- 5 冒頭部・終尾部ともに「中院本」の特異性が注目される。

3. 清盛の「不思議の事」

中院本「ぎわうぎによ事」冒頭部Ⅱ区分は、次のようである。

入だうかやうにてんかをたな心のうちににぎり給しかば、世のそしりをもはゞからず、人のあざけりをもへりみず、ふしぎの事をのみし給けり

高野本・屋代本の冒頭部Ⅱ区分も示す。

高野本

入道相国、一天四海をたなごゝろのうちに握り給ひしあひだ、世のそしりをも憚らず、人の嘲をもかへりみず、不思議の事をのみし給へり。

屋代本

入道相国、加様ニ天下ヲ掌ニ掬給之間、世ノ謗ヲモ不_レ憚、人ノ哂ヲモ不_レ顧、不思議ノ事ヲノミシ給ヘリ。

三本ともに、「世のそしりをもはゞからず、人のあざけりをもかへりみず」に「ふしぎの事」を行なったとする。この「ふしぎの事」の注目すべき実態を三例ずつあげてみる。あげる順序は、中院本・高野本・屋代本とする。

1 仏の舞を見て

㊥入道まひにやめで給けん、ほとけにこゝろをうつされける。てんせい此入だう殿は、いらいらしき人にておはしければ、まひのはつるをもをそしとやおもはれけん。はじめのわかをばうたはせ、せめのうたをいまだいひもはてざるに、仏をいだきて入給ふ。

㊦入道相国舞にめで給ひて、仏に心を移されけり。

㊧入道興ニ入給ヘル気色ヲ見テ、貞能仏ヲ懷テ障子ノ内へ押入タリ。

2 仏、清盛に暇を請う

㊥入だういやいやすべてくるしかるまじ、ともかうもたゞじやうかいがまゝぞとよ、たゞしぎわうがあるをはゞかるか、さらばぎわうをこそいださめ

㊦入道、「すべてその儀あるまじ。但祇王があるを憚るか。その儀ならば、祇王をこそ出さめ」

㊧入道、「何条其儀有ヘキノ。只兎モ角モ浄海カ計ヒナリ。義王カ在ルヲ憚ハ、義王ヲコソ出サメ」

3 「ほとけもむかしはほんぶなり〜」の祇王の今様を聞いた後に

㊥やがてまひをも見るべけれども、いさゝかまぎるゝ事あり、此後はめさずともつねにまいりてまひをもまひ、いまやうをもうたひて、ほとけなぐさめよ、さらばとうとうかへれ

㊦さては舞も見たけれども、けふはまぎるゝ事出来たり。此後は召さずとも常に参つて、今様をもうたひ、舞などを舞ふて、仏なぐさめよ」

㊧舞モ見タケレトモ、今日ハ紛ル事出来タリ。サラハ疾々罷帰レ。此後ハ不_レ召共常ニ参テ、今様ウタヒ舞ナトモ舞テ、仏慰メヨ」

ここから見られる清盛は、次のように言える。

1 では、高野本は「入道相国舞にめで給ひて、仏に心を移されけり」と見られるばかりであるが、中院本では、清盛の傍若無人ぶりが如実に描かれている。屋代本には、中院本に通じる清盛が見られる。

2 では、高野本に見られない横暴な清盛が中院本・屋代本に描かれている。(中院本：ともかうもたゞじやうかいがまゝぞ 屋代本：只兎モ角モ浄海カ計ヒナリ。)

3 では、高野本に見られない粗野で非情な清盛が見られる。(中院本：さらばとうとうかへれ 屋代本：サラハ疾々罷帰レ)

4 総じて言えることは、中院本と高野本には、清盛の描写に差異が見られることである。中院本は、高野本に比して、清盛の横暴な行為を前面に押し出している。清盛の横暴譚にふさわしい描写を見せている。高野本には、中院本の横暴な清盛を描くことがない。屋代本は中院本同様に、粗暴な清盛を描いている。中院本・屋代本には、清盛の「不思議な事」に比重がかかっている。

中院本・屋代本と高野本との異なりは、祇王の今様にも見られる。

「梁塵秘抄」巻二の「仏も昔は人なりき、我等もつひには仏なり、三身仏性異せる身と、知らざりけるこそあはれなれ」の末二句を歌いかえた祇王の今様を見ることにする。

中院本 ほとけもむかしはほんぶなり、われらもおもへは仏なり、いづれもぶつしやう具せる

身を、へだつるのみこそをろかなれ

高野本 仏もむかしは凡夫なり 我等も終には仏なり いづれも仏性具せる身を へだつるのみ
こそかなしけれ

屋代本 仏モ昔ハ凡夫ナリ我等モ終ニハ仏成リ イツレモ仏性具セル身ヲ隔ルノミコソヲロカナ
レ

高野本の末句「かなしけれ」に対して、中院本・屋代本では「をろかなれ」である。高野本では、
祇王の置かれた環境をわが身の悲しみとするのに対して、中院本・屋代本では清盛に対する批判的
な態度が見られる。

なお中院本終尾部に見られる清盛の仏探索の記述も、「不思議の事」の一つである。高野本には記
述がなく、中院本・屋代本の記述が目される。

全体的に見ると、中院本は清盛を描くことに焦点があると言える。横暴な行動の数々、終尾に在
る仏の探索など「不思議の事」をなす清盛である。

4. 信仰生活

八坂系「中院本」・覚一系「高野本」の「祇王」章段の核をなす祇王たちの信仰生活を見ることに
する。中核となる仏教思想に焦点を絞り、場面ごとの宗教性を注目する。「中院本」・「高野本」の異
なる宗教性に視点をおき、吟味を行なうことになる。

① 母が祇王の身なげをとめる時の教訓

中院本

しごもきたらぬおやに、身をなげさせん事、五ぎやくざいにてあらんずらん、みだ如来は西方浄
土をしやうごんし、一ねん十ねんをもきはらず、十あく五ぎやくをもみちびかんといふ、ひぐわん
まします也、四十八のせいぐわんの中に、第三十五の願にはわれらがやうなるぐちあんどむのもの
を、みちびかんとひぐわんましますなり、かのぐわんりにすがりて、西方の浄土ふたいのはう
どへ、まいらんとはおもはずやといひければ、

高野本

いまだ死期も来らぬおやに、身をなげさせん事、五逆罪にやあらんずらむ。

高野本では、母が祇王に教訓する内容は、五逆罪のみである。中院本では、五逆罪とともに、弥
陀四十八願中の第三十五願（女人往生願）を説いている。愚痴暗鈍の者の往生に、たよりある女人
往生願による弥陀の救済が、強調されている。これは八坂系諸本にのみ説かれるものである。天台
浄土教的な信仰の世界にありながら、特に第三十五願（女人往生願）を強調するのが注目される。

② 庵生活を送る三人（祇王・祇女・母）の信仰生活

中院本

（母）年四十五にてかみをそる、三人さがおくなる山ざとに、念仏してこそゐたりけれ

高野本

(母) 四十五にてかみをそり、二人のむすめ諸共に、一向専修に念仏して、ひとへに後世をぞねがひける。

「中院本」の「三人さがおくなる山ざとに、念仏してこそゐたれけれ」は、往生思想が素朴・簡潔な信仰生活を見せる。

「高野本」では、「一向専修に念仏して、ひとへに後世をぞねがひける」とあり、法然義的要素が「一向専修に念仏して」に見られる。親鸞の消息に「この念仏往生の願を一向に信じてふたごころなきを一向専修とはまふすなり」と見える専修念仏であり、愚管抄・六「建永ノ年、法然房ト言上人アリキ。……念仏宗ヲ立テ専宗念仏ト号シテ、タダ阿弥陀仏トバカリ申ベキ也。ソレナラヌコト、顕密ノツトメハナセソト言事ヲ言イダシ、……一向専修ニイリテ念仏バカリヲ信ジレバ、一定最後ニムカヘ玉フゾ」(『平家物語辞典』)に言う専修念仏である。「和語燈録」・「無量壽經」・「浄土宗要集」等、諸書に見られる。このような「専修念仏」の信仰生活に比すれば、中院本に見られる信仰生活は、旧仏教的世界の信仰生活である。

○庵の編戸をたたく者あり、驚く三人

中院本

我らがかやうにをこないてあるをさまたげんとてまゑんなどのきたれるにこそ、たゞしまゑんならばこれ程のたけのあみどを、をしあけていらん事はやすかるべし、たゞすみやかにあけたらん程にたすけばしかるべし、たとい命をうしなふとも、日比たのみたてまつりつる念仏、あひかまへてをこたるなよと、

高野本

其時尼どもきもを消し、「あはれ是はいふかひなき我等が念仏して居たるを妨んとて、魔縁の来たるにてぞあるらむ。……それに情をかけずして、命をうしなふものならば、年比頼たてまつる弥陀の本願をつよく信じて、隙なく名号をとへ奉るべし。声を尋て迎へ給ふなる聖主の来迎にてましませば、などか引撰なかるべき。相かまへて念仏おこたり給ふな」と、

高野本の「年比頼たてまつる弥陀の本願をつよく信じて、隙なく名号をとへ奉るべし。声を尋て迎へ給ふなる聖主の来迎にてましませば、などか引聖なるべき。」は、極めて法然義的色彩が濃い。「弥陀の本願」は、阿弥陀仏が衆生を救うためにたてた四十八願中、最も重んぜられた第十八願「念仏往生願」を言い、この願を「本願」とも言う。「無量壽經釋」に、「凡四十八願皆非本願、而特以念佛往生願而爲規模、故善導釋云、弘誓多門四十八 偏標念佛最爲親、人能念佛佛還念、專心想佛佛知之、故知四十八願中、唯以念佛往生願而爲願王也」と見える。また「聖主の来迎」は、弥陀信者が臨終の時、阿弥陀如来・観音・勢至をはじめ、多くの菩薩が来て、極楽へ迎えるという四十八願中の第十九願「来迎引接願」を言う。「阿彌陀經釋」に、「聖衆来迎者、念佛行漸成就、往生期既至時、彌陀如来與諸聖衆俱來迎接行者也」とある。「引撰」についても、「往生要集」に、「願佛今日決定引接於我、往生極樂」が見られる。「弥陀の本願」・「名号をとへ奉る」・「聖主の来迎」・「引撰」などの、第十八願(念仏往生願)、第十九願(来迎引接願)による信仰生活は、「中院本」の「日比たのみたてまつりつる念仏、あひかまへてをこたるなよ」とは、まったく異なる信仰生活であ

る。弥陀の本願・名号をとえたる・聖主の来迎・引撰などの、極めて法然義的な用語とは無縁の素朴な信仰生活である。

③ 仏の決意

中院本・高野本に見られる仏の決意を示す。

中院本

日比のとがをばこれにゆるし給へ、ゆるさんとのおたまはゞ、おなじあんじつにねんぶつして、ともわうじやうをいのるべし、猶もゆるさじとのたまはば、これよりいづかたへもあしにまかせてまよひゆき、いかならんいはのかど、松がねにたふれふすまでも、念仏してみだ三ぞんのらいがうにあづからん

高野本

かやうに様をかへて参りたれば、日比の科をばゆるし給へ。ゆるさんと仰せられれば、諸共に念仏して、ひとつはちすの身とならん。それになを心ゆかずは、……命のあらんかぎり念仏して、往生の素懐をとげんと思ふなり

高野本の「諸共に念仏して、ひとつはちすの身とならん」・「命のあらん限り念仏して、往生の素懐をとげん」には、仏の死後阿弥陀の極楽浄土に往き、生まれることを望む浄土往生への強い念願が示されている。「法華經藥王品」に、「往安樂世界阿彌陀佛大菩薩衆圍繞住處、生蓮華中寶座之上」とあり、「往生要集卷上義記」には、「往生者、捨此往彼生池蓮華中、言通諸受生、然諸教所勸偏在極樂、故以總言而屬別名」とある。また仏の述懐では「往生の素懐をとげん」に、浄土教信仰の目的達成が語られる。極めて法然義的な色彩が濃い。

中院本では「念仏してみだ三ぞんのらいがうにあづからん」が、注目される。ここには来迎思想が明示され、弥陀四十八願中の第十九願（来迎引接願）を核とする浄土教思想が思われる。「高野本」では、第十八願（念仏往生願）を核とする浄土教思想が、法然義的な浄土教信仰へと向かう。「中院本」は、用語・内容ともに素朴・簡素であり、天台浄土教的な信仰の段階であると言える。

○仏の仏法的な言葉

「中院本」・「高野本」ともに、仏の仏法的な言葉「つくづく物を案ずるに、……」が見られる。古典平家7本（屋代本・国会本・斯道文庫本・小城本・京都本・流布本・葉子十行本）を加え、比較・吟味を行なう。

吟味は以下に示す作表によることにする。

高野本	中	屋	国	斯	小	京	高	流	葉
つくづく物を案ずるに、	○	○	○	○	○	○	○	○	○
娑婆の榮華は夢のゆめ、楽しみ榮へて何かせむ。	○	○	○	○	○	○	○	○	○
人身は請がたく、仏教にはあひがたし。	○	○	○	○	○	○	○	○	○
此度泥犁に沈みなば、多生曠劫をばへだつとも、うかびあがらん事かたし。	○	○	○			○	○	○	○

年のわかきをたのむべきにあらず。老少不定のさかいなり。	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
出るいきの入るをもまつべからず。かげらふいなづまよりもなをはかなし。	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
一旦の楽しみにほこつて、後生を知らざらん事のかなしさに、	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
けさまぎれ出てかくなつてこそ参りたれ	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

この作表から得られる注目すべき点を、箇条書きにして示す。

- 1 8項目にわたるカテゴリーを、中院本以外の古典平家諸本に見ることができる。また、高野本をはじめとする古典平家諸本では、仏御前は質・量ともに充実し、堂々とした仏道を信ずる心を披瀝している。
- 2 中院本に見られるのは3カテゴリーに過ぎない。基本的な主張は示されているが、量的な少なさが注目される。
- 3 カテゴリーの出典を示しておく。

○しやばのゑいぐわは夢のゆめ、たのしみさかえても何かせん

白氏文集二十一・自詠「栄華瞬息間、求得将何用、何異_レ睡著人_一、不_レ知_レ夢是夢_一」

○人しんはうけがたく、仏経にはあひがたし

六道講式「人身難_レ受、仏法難_レ遇」

北本涅槃経 寿命品「仏出世難、人身難_レ得、値仏生信、是事亦難」

○いづるいき入るをまたず、かげろふいなづまよりも程なし

往生要集 卷上義記「尼詠吟云、出息農入息麻多奴世中遠農土加仁君波思希留哉」

往生要集 大文第二「出息不_レ待_二入息_一、入息不_レ待_二出息_一」

北本涅槃経 寿命品「是身無常念念不_レ住、猶如_二電光暴水幻炎_一」

④ 祇王の告白

前述③仏の決意において、八坂系「中院本」と覚一系「高野本」の信仰生活の基盤に相異があることを示した。

中院本の主意は、「念仏してみだ三ぞんのらいがうにあづからん」に見られる。ここには来迎思想が明示され、弥陀四十八願中の第十九願（来迎引接願）を核とする浄土教思想が思われる。しかし全体的にみると、天台浄土教的信仰生活である。

高野本の主意は、「(命のかぎり念仏して) 往生の素懐をとげんと思ふなり」に見られる。仏御前の、死後阿弥陀の極楽浄土に往き、生まれることを望む浄土往生への強い念願が示されている。ここでは第十八願（念仏往生願）を核とする浄土教思想が、法然義的な浄土教へと指向している。

さらにさかのぼって、両古典平家の信仰生活をみることにしたい。

①母が、祇王の身なげを止める時の教訓 では、中院本の母の教訓が注目される。「四十八のせいぐわんの中に、第三十五の願にはわれらがやうなるぐちあんどむのものを、みちびかんとひぐわんましますなり、かのぐわんりきにすがりて、西方の浄土ふたいのはうどへ、まいらんとはおもはず

や」と、五逆罪とともに、弥陀四十八願中の第三十五願（女人往生願）を説いている。愚痴暗鈍の者の往生に、女人往生願による弥陀の救済が強調されている。八坂系諸本にのみ説かれている。天台浄土教的な信仰の世界にありながら、特に第三十五願（女人往生願）を願うのが注目される。高野本では、母が祇王に教訓する内容は、五逆罪のみである。

②庵生活を送る三人（祇王・祇女・母）の信仰生活 では、中院本の素朴・簡潔な信仰生活「三人さがおくなる山ざとに、念仏してこそあたれけれ」を見せている。旧仏教的世界の信仰生活である。高野本では、「一向専修に念仏して、ひとへに後世をぞねがひける」と、法然義的要素が「一向専修に念仏して」に見られる。「専修念仏」の信仰生活である。

○庵の編戸をたたく者あり、驚く三人 では、高野本「年比頼たてまつる弥陀の本願をつよく信じて、隙なく名号をとへ奉るべし。声を尋ねて迎へ給ふなる聖主の来迎にてましますば、などか引撰なかるべき。相かまへて念仏おこたり給ふな」には、極めて法然義的色彩の濃い信仰生活がかがえる。第十八願（念仏往生願）・第十九願（来迎引接願）による信仰生活は、「中院本」の「日比たのみたてまつりつる念仏、あひかまへてをこたるなよ」とは、まったく異なる信仰生活である。

總じて言えば、中院本には天台浄土教的な信仰世界が、高野本には法然義的信仰の世界が描かれている。信仰の展開は、天台浄土教の信仰の世界から、法然義的信仰世界へと移行している。

さて、④祇王の告白で注目するのは、中院本では欠文となる「うれしかりける善知識かな」の吟味である。

高野本・中院本の該当箇所を示す。

高野本

ことしは纔に十七にこそなる人の、かやうに穢土をいとひ、浄土をねがはんとふかく思ひいれ給ふこそ、まことの大道心とはおぼえたれ。うれしかりける善知識かな。いざもろともにねがはん

中院本

わ御ぜんはおもふ事もおはせず、年もいまだ十七になりたまふとこそきくに、ゑどをいとひ、浄土をねがふべしとおもひいれたまふこそ、まことの大だうしんにておはしけれ

ふりかえって中院本の信仰生活を具体的にみると、①母が祇王の身なげを止める時の教訓で、注目すべきものは、弥陀四十八願中の第三十五願（女人往生願）を説いていることである。天台浄土教的な信仰世界にありながら、特に第三十五願（女人往生願）を強調するのが注目される。

②庵生活を送る三人（祇王・祇女・仏）の信仰生活 ○庵の編戸をたたく者あり、驚く三人 ともに素朴・簡潔な旧仏教的世界の信仰生活である。

③仏の決意 では、「念仏してみだ三ぞんのらいがうにあづからん」と、来迎思想が見られ、弥陀四十八願中の第十九願（来迎引接願）を核とする浄土教思想が思われるが、全体的にみると、天台浄土教の信仰生活である。

高野本で注目される信仰生活は次のものである。

②庵生活を送る三人（祇王・祇女・仏）の信仰生活は、「一向専修に念仏して、ひとへに後世をぞねがひける」の「専修念仏」の信仰生活である。

○庵の編戸をたたく者あり、驚く三人 では、「弥陀の本願」・「名号をとなえる」・「聖主の来迎」・「引撰」などの、第十八願（念仏往生願）、第十九願（来迎引接願）による信仰生活は、極めて法然義的である。

③仏の決意では、「往生の素懐をとげん」が注目される。浄土教信仰の目的達成が語られ、極めて法然義的な信仰生活である。

以上、中院本・高野本における信仰生活を、それぞれの場面ごとに、くりかえし見てきた。

中院本の信仰生活は、一部に法然義的要素も認められるが全体的にはまだ旧仏教的な浄土教思想（天台浄土教的な信仰の世界）の段階である。その中で特に母の祇王への教訓に見られた第三十五願（女人往生願）による救済が主張されるのが注目される。全体的に見れば、天台浄土教的な信仰の生活の状態にあるといえる。

高野本の信仰生活は、○庵生活を送る三人（祇王・祇女・仏）の信仰生活○庵の編戸をたたく者あり、驚く三人○仏の決意など、どの場面においても法然義的信仰の世界が認められる。

浄土教の発展と、『平家物語』の進展とのかかわり、即ち、天台浄土教的信仰世界から、法然義的信仰の世界への展開において、「うれしかりける善知識かな」の有無が生じる。中院本には、いまだ法然義的信仰世界の背景が存在しないために、「うれしかりける善知識かな」が見られない。浄土教の発展と、『平家物語』諸本間の関係を考察するのに「善知識」の有無が一つの指標となる。

④ 祇王の告白に続く、その後の展開を、作表にして示す。

	大道心	うれしかりける 善知識かな	皆往生の素懐 をとげる	後白河の法皇の 長講堂の過去帳	仏の探索	あはれなりし ことどもなり
中院本	○		○	○	○	○
屋代本	○	○	○	○	○	忝ナキ
斯道文庫本	道心	○	○	○	○	○
小城本	○	○	○	○	○	○
国会本	○	○	○	○		○
京都本	○	○	○	○		○
高野本	○	○	○	○		○
葉子十行本	○	○	○	○		○
流布本	○	○	○	○		難有かりし事 ども也

簡単に作表から得らるところを、簡条書きにして示す。

1 9古典平家に、「大道心」・「皆往生の素懐をとげる」・「後白河の法皇の長講堂の過去帳」・評語（あはれなりしことどもなり・忝ナキ・難有かりし事ども也を含む）4カテゴリーが見られる。古

典平家の共通項である。

- 2 「中院本」(八坂系)に、「うれしかりける善知識かな」が見られないのが、注目される。浄土教と善知識の関係は、『平家物語』諸本間の関係を探る一つの指標となろう。
- 3 清盛の仏探索を持っていない古典平家が注目される。百二十句本の平仮名本(国会本・京都本)は、漢字・片仮名交り本(斯道文庫本・小城本)と異なり、仏の探索記述を持っていない。

さいごに「中院本」・「屋代本」の該当本文を示しておく。

中院本

四人ひとつあんじつに念仏して、たがひにわうじやうをいのりけるに、ちそくのふだうこそありけれども、つゐにわうじやうのそくわいを、とげらるとぞうけたまける、入道仏をうしなひて、手にてをわけてたづねさせられけれどもなかりけり、じやうかいほとけはあまりにみめのよかりつれば、てんぐがとりたるにこそとのたまひける。其後や、ありてきゝいだされたりけれ共、さやうになりたらんずるものをばとて、たづねられざりけり、かのちやうかうだうのくわこちやうにも、ぎわうぎ女仏とぢらがゆうれいと、入れけるとぞうけ給はるあわれなりし事どもなり

屋代本

一庵室ニ閉籠リ、日夜朝暮ニ不_レ懈、花香ヲ備へ、一心ニ弥陀ヲ念シケレハ。遅速コソ有ケレトモ、四人ノ尼共、遂ニ往生ノ素懐ヲ遂ケルトソ聞ヘシ。入道相国仏御前ヲ失テ、手ヲ分テ被_レ尋ケレ共無リケレハ、「一定入道カ仏ハ、天狗ニ被_レ取タリ」トソ宣ケル。遙ニ在テ聞出サレタリケレ共、「左様ニ思立テ浮世ヲ厭ハン者ヲ、中々兎角云ニ不_レ及」トテ、其後ハ尋モ無リケリ。サレハ後白河ノ法王ノ長講堂ノ過去帳ニ、「義王、義女、仏、閉等カ尊霊」ト、四人一所ニ入セ給ケリト聞ヘケルソ忝ナキ。

5. おわりに (まとめとして)

これまで述べてきたことの要点を、簡条書きにまとめておく。

- 1 冒頭部について「中院本」の冒頭部は、Ⅲ区分に分け、整理を行なう。Ⅰ平家一門による専制時代におけるⅡ清盛の横暴な行為「不思議の事」のⅢ例話として祇王説話を語るとする前文の必要条件が揃い、その後に詳述が続くという一貫性のある書き出しとなっている。中院本のみが(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)を有する。
- 2 中院本以外の古典平家(高野本を含む)は、中院本Ⅰ区分を「祇王」章段に持っていない。Ⅰ区分は諸本により、「祇王」章段の前後に置かれ、二章段にまたがるのが注目される。百二十句本には漢字・片仮名交り本(斯道文庫本・小城本)と平仮名本(国会本・京都本)がある。漢字・片仮名交り本は、第二句参内上祿(終尾Ⅰ)・第三句義王(Ⅱ・Ⅲ)と二句にまたがるが連続性が見られる。平仮名本は、第二句三台上祿(終尾Ⅰ)から第五句義王へと飛び、前章段とのつながりがなく独立性が強い。

- 3 終尾部について「中院本」は、清盛の仏探索・長講堂の記事・評語（あわれなりし事どもなり）を終尾部に持つ。
- 4 覚一系諸本（高野本・流布本・葉子十行本）には、清盛の仏探索の記述が無い。また、百二十句系統本の平仮名本にも、清盛の仏探索は、見られない。
- 5 清盛の「不思議の事」について 総じて言えることは、中院本と高野本には、清盛の描写に差異が認められることである。中院本は高野本に比して、清盛の横暴を前面に押し出し、清盛の横暴譚にふさわしい描写を見せている。「不思議の事」に、祇王の今様の末句に「をろかなれ」と中院本に見られることも、清盛の仏探索が中院本に見られることも、すべて含まれる。
- 6 全体的に見ると、中院本は清盛を描くことに焦点があると言える。横暴な行為の数々、終尾に在る仏の探索など「不思議の事」をなす清盛が描かれている。
- 7 信仰生活について 中院本の信仰生活は、一部に法然義的な要素も認められるが、全体的にはまだ旧仏教的な浄土教思想の段階である。その中で特に母の祇王への教訓に見られた第三十五願（女人往生願）による救済が主張されるのが注目される。全体的に見れば、天台浄土教的な信仰生活の状態にあるといえる。高野本の信仰生活は、○庵生活を送る三人（祇王・祇女・仏）の信仰生活○庵の編戸をたたく者あり、驚く三人○仏の決意 など、どの場面においても法然義的信仰の世界が認められる。
- 8 高野本（覚一系）では、粗暴な行動の清盛の描写がほとんどなかった。それにかわり、仏教的な色彩の濃い祇王たちの信仰生活が前面に押しだされ、出家往生譚の展開を見せている。
- 9 中院本に「うれしかりける善知識かな」が欠文となるのは、法然義的要素の濃い女人往生譚の高野本とは異なり、それ以前の天台浄土教的な信仰世界を背景とする為である。両本ともに女人往生譚ではあるが、信仰（浄土教）の進展が、「うれしかりける善知識かな」の有無に影響をおよぼしたものである。
- 10 浄土教の発展と、『平家物語』諸本間の関係を考察するのに、「善知識」の有無が一つの指標となる。

参考図書

- 『平家物語（中院本）と研究（一）』高橋貞一編著 未刊国文資料刊行会
 『平家物語百二十句本』思文閣
 『平家物語』新潮日本古典集成 新潮社
 『屋代本高野本対照平家物語』新典社
 『百二十句本平家物語』汲古書院
 『小城鍋島文庫本平家物語』汲古書院
 『平家物語』新日本古典文学大系 岩波書店
 『平家物語』日本古典全書 朝日新聞社
 『平家物語』おうふう

- 『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂
『広説佛教語大辞典』中村元著 東京書籍
『平家物語考』山田孝雄著 勉誠社
『中世文学序考』関口忠男 武蔵野書院
『平家物語全注釈』上巻 富倉徳次郎 角川書店
『平家物語大事典』東京書籍
『平家物語私考』市井外喜子 新典社

(2013年9月26日受理)